

特集にあたって (特集 学術情報へのアクセス向上 を目指して -- 機関リポジトリのいま)

著者	澤田 裕子, 高橋 宗生
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	162
ページ	2-3
発行年	2009-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00004789

特集にあたって

澤田裕子・高橋宗生

●機関リポジリイとは何か

二一世紀に入って、科学技術の発展を背景に先進国を中心としたデジタル化が世界中に波及しつつある。学術雑誌の価格の高騰化や学術交流の商業出版社への依存傾向を背景にして、研究機関が学術資源への自由で制約のないオープンアクセスを目指し、自らの知的生産物をウェブで発信する動きが出てきた。世界的な活動として、二〇〇一年二月にハンガリーのブダペストでオープンアクセスに関する会議が行われ、「ブダペスト・オープンアクセス・イニシアティブ」(BOAI)が表明されている。研究者自身が所属機関のウェブアーカイブで論文を公開するセルフアーカイビングや無料で講読できる学術雑誌(オープンアクセスジャーナル)を創刊することが具体的な方法として挙げられている(参考文献①)。二〇〇三年六月には「ベセスダ宣言」、一〇月には「ベルリン宣言」が相次いで採択され、オープンアクセスの概念はより詳細で明確になってきている(参考文献②、③)。また、一二月には途上国を

含む国際的な図書館組織、IFLAが「学術研究文献へのオープンアクセスに関する声明」を採択し、オープンアクセス運動を支持する姿勢を示している(参考文献④)。他にも多くの国際的組織がオープンアクセスの必要性を指摘し、実現に向けて方針を打ち出している。

各研究機関が発表してきた学術論文、単行書、報告書等の知的生産物をデジタル資料として収集、保存し、ウェブ上で公開する機関リポジリイ(IR)は、セルフアーカイビングを支援する代表的なシステムである。IRの設置は利用者が無料で学術資源を利用できるといふオープンアクセス環境の整備に寄与する上、研究機関にとって自らの説明責任を果たし、その成果を効率的に普及させるといふ利点がある。低予算の途上国の研究機関が既存の研究成果や最新の学術論文に自由にアクセスできることは、特に生命を扱う科学・医学分野において多大な貢献をもたらす。また、途上国の研究者も研究成果を世界的ネットワークにのせるようになれば、それらが掲載された現地の研究報告書や学術雑誌による知的貢献が期待できる。研究コミュニティにも新たな繋がり、広がり形成されるだろう。商業データベースも今や何誌収録しているかという競争の時代に入っており、途上国を含む各国の学術雑誌を網羅することは重要なビジネスになりつつある。例えば、エルゼビア社の書誌・引用文献データベース、Scopusのデータによって構築された無料の学術雑誌ランキングサイト、SCImago(<http://www.scimagojr.com/index.php>)では、二〇〇九年一月六日現在、二二三三カ国の雑誌論文の引用状況が国別に一覧でき、途上国の学術雑誌も数多く引用されていることが分かる。途上国の研究機関が生み出す知的生産物のオープンアクセス化もまた世界的な利益をもたらすのである(参考文献⑤)。しかし、経済的、政治的諸問題を抱える途上国がオープンアクセスを実現するのは容易ではない。世界の各国・地域が協力して、自由で開かれた学術コミュニティを実現するという目的を共有することに希望を繋ぎたい。

学術情報へのアクセス向上を目指して—機関リポジリイのいま

含む国際的な図書館組織、IFLAが「学術研究文献へのオープンアクセスに関する声明」を採択し、オープンアクセス運動を支持する姿勢を示している(参考文献④)。他にも多くの国際的組織がオープンアクセスの必要性を指摘し、実現に向けて方針を打ち出している。

各研究機関が発表してきた学術論文、単行書、報告書等の知的生産物をデジタル資料として収集、保存し、ウェブ上で公開する機関リポジリイ(IR)は、セルフアーカイビングを支援する代表的なシステムである。IRの設置は利用者が無料で学術資源を利用できるといふオープンアクセス環境の整備に寄与する上、研究機関にとって自らの説明責任を果たし、その成果を効率的に普及させるといふ利点がある。低予算の途上国の研究機関が既存の研究成果や最新の学術論文に自由にアクセスできることは、特に生命を扱う科学・医学分野において多大な貢献をもたらす。また、途上国の研究者も研究成果を世界的ネットワークにのせるようになれば、それらが掲載された現地の研究報告書や学術雑誌による知的貢



学術情報へのアクセス向上を目指して—機関リポジトリのいま

● 本特集の趣旨

本特集はIRとオープンアクセスジャーナルを中心としたオープンアクセス資源に焦点を当て、デジタル化時代の途上国研究に欠かすことのできないウェブ上の学術資源の現状とそれをめぐる学術交流の動向について考察することを趣旨としている。まず、オープンアクセスに関するいくつかの主要な動向を考察し(テーマ編)、次に各地域別・国別にオープンアクセス資源の構築・利用状況を報告し、今後の活用について考える(地域編)。各論考の中ではデジタルアーカイブについて触れるものもある。地域別・国別の調査ではIRの構築状況を調べるのに際して、世界中のオープンアクセスリポジトリを自己申告によって登録しているOpenDOAR (<http://www.opendoar.org/>) や ROAR (<http://roar.eprints.org/>)、また、オープンアクセスジャーナルを調べるのに際して、無料で全文公開している査読付き電子ジャーナルのダイレクトリ、DOAJ (<http://www.doaj.org/>) を利用した。各稿でもこれらのサイトについて言及しているが、URLは省略させていただいた。

● 各論考について

次に、テーマ編、地域編にそれぞれ収録された各論考を手短にみていくことにします。まず、テーマ編では高木(和)稿が先進

五カ国、およびEUを中心にオープンアクセス政策の現状を解説する。杉田(い)稿は日本のIRコンテンツを横断検索するシステム、JAIROについて詳細情報を提供している。佐藤・逸村稿は本研究所図書館のIRであるARRIDEの利用状況に關し、アクセスログの分析を試みたものである。杉田(茂)稿は、接続先紹介システムを通して文献書誌データベースとIR上の全文情報をリンクさせる日本発のシステム、AIRWAYを紹介している。続く高木(敏)稿はオープンアクセスジャーナルの刊行状況とそれを取り巻く環境に關して解説したものである。

本研究所図書館の職員多数が執筆した地域編からは、IRの普及状況に大きな地域格差があることが読み取れよう。アジア、中東、アフリカなどの大地域間の格差に加えて、それぞれの地域に含まれる国々の間にも顕著な格差がみとれる。IRどころか、OPACさえ有料の国々もある中、オープンアクセスに対する考え方の違いがその普及、発展に大きな影響を与えており、コンセプトの十分な理解が重要といえる。研究者が各自の研究成果を積極的にIRに登録するに至るには、情報通信インフラや法の整備、多言語の処理技術の向上など、関連する問題を事前に解決せねばならない国々も多い。一方、特にインドやラテンアメリカ諸国など、ローマ字で書かれた多数の出版物を持つ国々では、既に多くのIR

とオープンアクセスジャーナルを公開している。先進国だけでなく、これらの国々が採用した諸政策にも注目する必要がある。本特集はIRやオープンアクセスジャーナルを通して途上国研究情報を探った、我国で最初の試みと位置づけている。日々刻々と変化するウェブ上に新しく形成されつつあるオープンアクセスという学術コミュニティのいまを、読者の方々に伝えることができれば幸いである。

(ちわだ ゆうこ、たかはし むねお
—アジア経済研究所図書館)

《参考文献》

- ① Budapest Open Access Initiative <http://www.soros.org/openaccess/>
- ② Bethesda Statement on Open Access Publishing <http://www.ugres/~aiporcel/bethesda.pdf>
- ③ Berlin Declaration on Open Access to Knowledge in the Sciences and Humanities <http://oa.mpg.de/openaccess-berlin/bertinddeclaration.html>
- ④ Statement on Open Access to Scholarly Literature and Research Documentation <http://www.ifla.org/V/cdoc/openaccess04.html>
- ⑤ Laura Winberley, "Open Access Journals in the Developing World," *Digital Library of Information and Technology*, 27 November, 2008. <http://dist.sir.arizona.edu/2513/>